

[授業報告]

アンソロジー  
詞華集を作る授業—感性を磨く教育\*

東 聖子\*\*

- 一 アンソロジーの定義
  - 二 渡部昇一氏における勅撰和歌集のアンソロジー
  - 三 山本健吉氏における古典詞華集
  - 四 外山滋比古氏におけるアンソロジー論
  - 五 授業：ワークショップ「詞華集を作る」
- 結語

日本文学における短詩型文学についての研究者である筆者は、約20年ほど前から「詩華集（アンソロジー）を作る」というワーク・ショップ的な授業を展開している。実施した大学は、本学短期大学部、日本女子大学、聖心女子大学などである。

### 一 アンソロジーの定義

まず、「詞華集」および「アンソロジー」とは何か、その定義について述べてみたい。

『日本国語大辞典』には、次のごとくある。

アンソロジー [名] (英anthology) 国別、流派別、主題別など、一定の基準で選ばれた詩歌集・文芸作品集。名詩選。詞華集。

また『世界大百科事典』には、次のごとくある。

アンソロジー anthology 一般に同一の文芸形式ないし主題の下にまとめられた諸作家の選集を指す語。詩の場合が多く、〈詞華集〉〈名詩選〉などと訳される。もともなった古代ギリシア語anthologia の原義は〈集華〉であるが、これが今日の用法で使われるのは10世紀ビザンティン時代の学者が、古代より数回の集成編纂を経た三千数百編の短詩の集大成を遂げたときこの語を冠したことによる。その一つ《パラティナ詞華集》は15巻、いま一つの《プラヌデス詩花集》は1巻に収まる。その内容は敬虔なキリスト教徒の祈り、現世の哀楽に耽溺する古代人の歌、草木・芸術品・動物・酒などをめでる歌、風刺警句の詩、なぞなぞ詩、カリグラムなど、まさに玉石混交の観を呈しているが、ルネサンス以降ロンサルなどの詩人たちには絶大な影響を及ぼした。ラテン詩のアンソロジーも6世紀アフ

\* Lessons in creating anthologies : Education that cultivates sensitivity

\*\* Shoko Azuma 十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 (Department of Culture and Communication)  
キーワード：アンソロジー 詞華集 万葉集・勅撰集を読む 選ぶなかの個性 感性を磨く

リカ北岸の詩人たちによって編まれ、中世ラテン文学に与えた影響は大きいが、文学上のメリットは、《ギリシア詞華集》に比肩しえない。（以下、傍線は筆者による）

さらに『日本大百科全書』には、こうある。

アンソロジー anthology 詞華集、名詩選。ギリシア語のアンソロギア anthologia (華を集めたもの)に由来する。優れた詩や散文を集めたもので、最初の編者は紀元前1世紀のメレアグロスとされ、詩人50人のエピグラム epigram (短い風刺詩)を集めた。アンソロジーの名は2世紀の編者ディオゲニアヌスによって用いられた。こうして前7世紀から後10世紀に至る300人の詩人による6000の短詩が10世紀のケファラスによって完成され、アンソロジーというこの『ギリシア詞華集』のことをさすようになった。近世のアンソロジーは叙情詩を中心とした短詩からなり、イギリスには『トテル拾遺選』Tottel's Miscellany (1557)、フランスでは『現代詩選』Le Parnasse contemporain (1866)があり、また、中国の『唐詩選』も含められよう。アンソロジーはジャンル別、時代別など種々あるが、内容は編者の鑑識眼や好みによって左右されることが多い。

アンソロジーとは、詞華集、名詩選のことで、ギリシア語のアンソロギアの原義は〈集華〉、すなわち、〈華を集めたもの〉であるという。アンソロジーというと、『ギリシア詩華集』が代表的なものである。中国の『唐詩選』も含める。その内容はさまざまであるが、編者の鑑識眼や好みに影響されることが多い。以上が、辞書的な定義の概略である。

## 二 渡部昇一氏における勅撰和歌集のアンソロジー

かつて、梅棹忠夫著『知的生産の技術』(1969年、岩波新書)<sup>(1)</sup>が大ブレイクした。それは大学生や研究者や、知的な仕事をしている人たちに、創造的な「知的生産」領域があり、その技術を自覚的に訓練しつつ獲得してゆくことを新鮮に考えさせた書物だった。梅棹氏には『情報の文明学』『研究経営論』『情報管理論』等の著書もある。『知的生産の技術』は、1970年代を迎えようとした情報化時代のとば口にあって、個人がどう知的に武装し、情報を管理し、創造的に知的生産をおこなうためには、新しい生活の技術が必要だと提言している。手帳、カードの取り方、タイプライター、手紙などが目次にあり、現代から見るとやはり40年以上前の、昭和の時代を反映している。

その7年後に刊行されたのが、渡部昇一著『知的生活の方法』<sup>(2)</sup>(1976年、講談社現代新書)である。現在の新書の帯には「頭を活性化し、発想を楽しむ！不朽の大ベストセラー！」とある。本書は37年も前に刊行されているが、現代でも八割方は古さを感じさせない。目次は、「1 自分をごまかさない精神／2 古典をつくる／3 本を買う意味／4 知的空間と情報整理／5 知的生活と時間／6 知的生活の形而下学」から成っている。当時では、梅棹氏の書物のインパクトのほうが強烈であったが、現在は渡部氏の書物が古びていない。両新書を比較するならば、梅棹氏の方がより具体的であり、パソコンが一般化する以前の時代的制約がある。それに対して、渡部氏の新書は、ある程度の具体性もあるが、より抽象的であり、かつ歴史적인見地がある。渡部氏はまた『三国史』、頼山陽、漱石、ゲーテ、カントなどの歴史的作品や人物を掲出し自在に述べている。これらはすでに、ある普遍性を持っている。この両書のみ

るに、時代に即応したハウツウ物の一過性と、普遍性の有無が興味深い対比を見せている。渡部氏はその点をよく認識しており、前書きで二十年以前に読んだハマトンの『知的生活』に「非常な啓発」を受けたが、その本はヴィクトリア朝のイギリス人を相手にしており、縁遠い話もあるが「現代でも示唆に富む」と語っている。また、渡部氏は、現在の「情報洪水」のなかで「知的生活」をいかに心ざすかの書であると本書の視点を述べた。早すぎる情報化社会の時代変化において、四十年という時間と、書物の価値の変化が歴然とあった。

さて、詞華集のテーマに戻ろう。渡部昇一氏は『知的生活の方法』の「貧乏学生時代」の条において、青春時代の寮生活における休日の過ごし方についてこう語っている。

### 貧乏学生時代

貧しくて、しかも知的生活に激しくあこがれている若いときは、食事を節約したり、バス代を節約することは案外苦にならないものだ。

・・・・・・・・(中略)・・・・・・・・

時間こそは私がふんだんに持っていた唯一のものだったのである。英語だけではなく、日本やシナの古典を読む時間があった。『古事記』も『伊勢物語』も『源氏物語』も、また唐詩も孔孟も読めた。和歌は万葉から新古今まで通読し、一読して気に入ったものを書き抜いていって見たら、新古今のものが一番多く、自分の趣味がどこにあるかを発見した記憶がある。

・・・・・・・・(中略)・・・・・・・・

日曜の午後ともなれば、学生寮には人っ子一人いなくなるのが常であった。遊びに行くにも、絶体絶命、金のない私は、古今集をひろげながら

からごろも日も夕暮になる時は 返す返すぞ人の恋しき

・・・・・・・・(中略)・・・・・・・・

知的生活の流れは、貧富、身分、性別、時代のすべてのワクを越えて、それを理解するものだけのあいだを、外からは見えないで、あたかも雪の下水のごとくにひそやかに流れてくるのである。

### タイム・リミット

どんなむずかしい短歌にも五分以上の時間をかけぬこと、長歌にも十五分以上はかけぬこと、というタイム・リミットをつけて読めば、比較的短時間に『万葉集』でも『古今集』でも通読できる。そして自分にピンときたものにだけ、丸のしるしをつけておく。二度目にはそのしるしをつけたものだけ読み、特によいと思ったのには、もう一つ丸を重ね、二重丸のしるしをつける。そしてさらに二重丸じるしのもので読みかえて、その中でいちばん気に入ったものをノートに一日何首か書き抜く。そして暗記する。この方式でやると、比較的短い期間に勅撰集一つをわりと楽しく自分のものにしたような気分になれる。・・・・・・・・そして専門の国文学者だって、勅撰集を通読している人はそんなに多いものではなさそうである。

渡部昇一氏は英語学の研究者だが、若い貧乏学生の頃の寮生活において、日本の『万葉集』から『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』『金葉集』『詞華集』『千載集』『新古今集』までの八代集をタイムリミットを設けて、読破したという楽しい体験談は、大変に刺激的だった。

若くみずみしい感性をもった学生時代に、日本の万葉や勅撰集を素手で読むという方法があるということは、新しい短詩型文学のワークショップ授業に取り組み契機となった。

### 三 山本健吉氏の古典詞華集

日本の評論家のなかで、詞華集（アンソロジー）の必要性を早くから講じていたのは、山本健吉氏である。「詩の自覚の歴史」（『山本健吉全集第1巻』所収、1983年、講談社）<sup>(3)</sup>において、こう語っている。

日本にはまだこれまで一冊の詞華集（アンソロジー）も編まれていないことの怠慢についてである。あれほどやかましく国民文学について言われながら、誰ひとり詞華集の編纂について発言した人がないのだ。

・・・・・・・・（中略）・・・・・・・・

サマセット・モームは『読書案内』のなかで、イギリスの詩のすぐれた選集として、ポール・グレイヴの『詞華集』、オックスフォード版『イギリス詩選』、ジェラルド・プレットの『イギリス短詩選集』の三つを挙げ、さらに新しいものとして、ジョージ・ライランズの『人間の諸時代』を挙げている。フランスには、特異なものとして、ジードやエリュアールの選んだ詞華集があるはずである。モームは、特別な気分のあるときに、ふさわしい環境のもとで、何時でもポケットから取り出して、詩集を読む楽しみを満喫したいと言っている。

・・・・・・・・（中略）・・・・・・・・

日本の詩の精髓を網羅するということは、そこに日本語としての詩的体験が凝縮されているということである。

オックスフォード版の詞華集のように、まずアカデミックな、オーソドックスの詞華集が選ばれ、それに対して、感受性が豊かで、より個人的な個人による詞華集が選ばれる順序になればよいと思う。私自身が座右に欲しいのだから、出来れば自分でやりたいくらいのものだが、過去千年以上に蓄積された瓦礫の山に分け入ることは、個人の力に余るのである。

この部分は本論の前半であり、後半では山本氏は日本の詩の自覚の歴史における三つの頂点として、人麻呂と世阿弥と芭蕉を挙げ、それぞれを運命的な岐路に立たされた巨匠として位置づけた。また、このなかの「日本にはまだこれまで一冊の詞華集（アンソロジー）も編まれていないことの怠慢」という文言については、アンソロジーをどうとらえるかによって立場は変わるであろう。日本の勅撰和歌集を国家的な意図によるアンソロジーとする見解もある。ただ、近代の日本の教育において、詞華集（アンソロジー）を個々人が作ることはほとんどなかった。

これに呼応するかのようには、『完訳・日本の古典・別巻1 古典詞華集一』（1987年、小学館）<sup>(4)</sup>が出版され、編者には山本健吉氏が選ばれている。日本の古典文学全集は多く刊行されているが、別巻に詞華集を持つものは他に例がない。山本氏の「凡例」にこうある。

一、『古典詞華集』は、「完訳日本の古典」シリーズの別巻として、記紀・万葉の時代から、近世末期に至る古典詩歌のすべてを対象に、名品を選んで、鑑賞を加えるものである。・・・・・・・・本巻には、季節にかかわる名歌。名句を取めた。

山本氏は編集者出身であり自らも短詩型文学を創作する近代の評論家である。そのような美意識の高い氏のアンソロジーは意味深い。しかしながら、無名の読者たちが、折々に心ひかれた作品を取り出して、マイ・アンソロジーを作ってみることも贅沢な楽しみだろう。

#### 四 外山滋比古氏におけるアンソロジー論

外山滋比古氏は、日本独自に発展をとげた勅撰和歌集を、ひとつのアンソロジーとして認識している。英文学者でありながら、外山氏は日本文学や日本語などについての造詣が深い。『古典論』(2001年、みすず書房)<sup>(5)</sup>において、「選集」の条でこう述べた。

勅撰集とは天皇または上皇の命により指名された撰者によって編まれた作品集、アンソロジーである。もっと古くは平安初期に編まれた漢詩集(三つあり)から『経国集』二十巻が王朝漢文学の精華を伝えている。やがて、勅撰和歌集がはじまり、『古今和歌集』(905)から『新続古今和歌集』(1439)まで、すべて二十一代集が五百年余りにわたる名歌を収めている。驚くべきアンソロジー編纂というべきである。……………

アンソロジーは、そのままでは、散佚してしまうであろう、ことに和歌のように短詩型文学を後世に伝えるのにもっとも有効適切な方法であったと思われる。

……………(中略)……………

勅撰集の撰者は自らも歌人であるだけではなく、すぐれた鑑識力をそなえた批評家、文学史家でなければならなかったことがわかる。……………編者の主観、判断に合致するものがとられ、そうでないものが捨てられるのは自然の理であるが、その主観的判定が恣意的なものによって左右されるようなことがあっては、アンソロジーとしての価値はなくなる。多くの人の認める、時代の趣味、流行から大きく逸脱しないような選択がおこなわれなくてはならないのである。

……………(中略)……………

アンソロジーは和歌に限ったものではない。俳句の歳時記は、各季語に例句がつけられているところがアンソロジーの機能もっている。

……………(中略)……………

作品は撰者、編者によって古典的になるのである。すくなくとも典型化する。

外山滋比古氏はここで、日本の勅撰集は詞華集(アンソロジー)であるという見解をとっている。あるいは、歳時記もひとつのアンソロジーであえるとされた。本書は、外山氏が展開している『近代読者論』の流れをひく論である。

#### 五 授業：ワークショップ「詞華集を作る」

実際の授業における「詞華集を作る」ワークは、次のように行った。

- 1 目的 日本文学における和歌を鑑賞しながら、好きな和歌を選んで、マイ・アンソロジーを作成する。
- 2 方法 『万葉集』巻八と巻十の四季の和歌(万葉数は部立が混沌としているため)

『古今和歌集』の春・夏・秋・冬と恋の巻

『新古今和歌集』の春・夏・秋・冬と恋の巻

上記のうちどれかひとつの撰集を選び、それを楽しく鑑賞しながら好きな和歌を選ぶ。「春・夏・秋・冬」から各15~20首を、また「恋」から20首を選び、所定の用紙に、正確な表記で「作品番号と和歌と作者」を丁寧に書く。

- 3 考察 自分が読んだ和歌の撰集全体の文学史的意義を簡単にまとめ、撰集全体を読んで、実際にはどう感じたかという、読後の感想をまとめて書く。また、自分が選んだ「春・夏・秋・冬・恋」の和歌を眺めて、マイ・コレクションの傾向や、歌語の趣味、作者の傾向などを自己分析する。また、この「詞華集を作る」というワークを行っての感想を述べる。
- 4 最後に参考文献を書く。
- 5 返却 担当教員は、筆で「詞華集」と題箋を書き、表紙をつけて、和歌集の風情に装幀をする。個々の学生にコメントを記して返却する。

<p>〈夏〉</p> <hr/>          <p>1</p>	<p>歌番号</p> <p>〈春〉</p> <p>本文</p> <p>作者</p> <p>「新古今和歌集」</p> <p>〈詞華集を作る〉</p> <p>氏名</p>
--	---

<p>〈秋〉</p> <hr/>          <p>2</p>	
--	--



の継承と拡大再生産こそ、定家の信ずる「歌の道」であった。

<和歌の世界>とは、「ことほり」の体系である日常の合理的秩序の世界（仮名として把握されている世界）に対し、もう一つの人間的世界として構築された、共有の「こころ」の体系である。

現代社会を過ごしている若者が、現代の日本語とは異なった古典的な詩語によって語られている古人のさまざまな「こころ」模様を読むことは、学生たちの豊かな表現力の可能性を育成することになるだろう。尼ヶ崎彬氏は「言葉による「こころ」の型の継承と拡大再生産」が定家の歌の道であると語った。「詞華集を作る」授業は、日本文化の古典的な詩の時空を若々しい感性が通過することにより、古人のこころの表現力を継承し、現代の新しい言語表現を創造してゆく糧になることだろう。

### 参考文献

- (1) 梅棹忠夫著『知的生産の技術』（1969年、岩波新書）
- (2) 渡部昇一著『知的生活の方法』（1976年、講談社現代新書）
- (3) 「詩の自覚の歴史」（『山本健吉全集第1巻』所収、1983年、講談社）。最初に「詩の自覚の歴史」は1955年1月から10月に、『古典と現代文学』と題して雑誌『群像』に連載されたなかの巻頭にある。その後、詩の自覚の歴史の追究は昭和1961年にも書かれた（全集第3巻所収）。さらに、1979年2月に『詩の自覚の歴史』が完成した。山本氏は「詩の自覚の歴史」という題名で、三度同じテーマを追究した。本論の引用本文は『古典と現代文学』として1955年12月に講談社から出版されたものである（読売文学賞受賞）。全集第1巻に所収されている。
- (4) 山本健吉編『完訳・日本の古典・別巻1 古典詞華集一』（1987年、小学館）
- (5) 外山滋比古著『古典語』（2001年、みすず書房）
- (6) 尼ヶ崎彬氏著『花鳥の使—歌の道の詩学』（1983年、勁草書房）

尚、2013年春にSumie Jones編『Edo Anthology』がハワイ大学出版社から刊行される。現代の欧米におけるアンソロジー受容の一端を示している。